

は じ め に

大きな被害に見舞われた東日本大震災から9年が経ち、関係各位のご支援の下、子どもたちを取り巻く環境は大きく改善されました。

令和2年度が最終年度となる大船渡市復興計画も、いよいよ総仕上げとなりますが、このことと並行して、持続可能なまちづくりに向け、少子高齢化及び人口減少の進行に伴うさまざまな環境変化や、人々の価値観の多様化などに適切に対応していくことが肝要であります。

こうした状況を踏まえ、本市教育委員会におきましては、大船渡市総合計画及び大船渡市教育振興基本計画に基づき、「豊かな心を育む人づくりの推進」を基本に、市長部局との連携を深めながら生涯学習、学校教育、文化など、各般にわたる諸施策を積極的に展開して参ります。

特に、次世代を担う子どもたちが、心身ともに健やかで人間性豊かに成長できるよう学校教育の充実を図るとともに、家庭・学校・地域の連携により地域教育力のなお一層の向上に努めて参ります。

本書は、当市教育行政の概要、現状について「大船渡の教育 No.50 令和2年度版」としてまとめたものです。ご高覧いただき、本市教育の進展のため、ご指導いただければ幸甚に存じます。

令和2年12月

大船渡市教育委員会

教育長 小 松 伸 也

大船渡市民憲章

昭和 58 年 6 月 1 日制定

平成 14 年 9 月 4 日改正

わたくしたちの大船渡市は、三陸の美しい自然のなかで、先人のたゆまぬ努力により、恵まれた港を中心に発展してきたまちです。

わたくしたちは、このかけがえのないふるさとを受けつぎ、市民としての自覚と誇りをもって、明るく豊かな未来をひらくため、ここに市民憲章を定めます。

わたくしたちは、

- 1 学ぶ心を大切にし、香り高い文化のまちをそだてます。
- 1 働く喜びをもち、健康で活気あるまちづくりにはげみます。
- 1 明るい家庭をつくり、希望と安らぎのあるまちをきずきます。
- 1 社会のきまりを守り、安全で住みよいまちづくりをめざします。
- 1 恵まれた自然を生かし、海と緑の美しいまちをつくります。

大船渡市のシンボル

大船渡市の紋章



大船渡市の『大』の字を、波と山に図案化して、海からも、陸からも発展するよう願いをこめて象徴したものである。

大船渡市の花<つばき>



基石や長崎海岸など、暖地に多く自生する「ヤブツバキ」のことである。

寒さをしのいで美しい深紅の花を咲かせ、北国岩手の春をいち早く告げる。ふるさと大船渡の人々の心に、うるおいと豊かさをあたえてくれる。

大船渡市の木<まつ>



海岸の岩などにみられる「クロマツ」、内陸に多い「アカマツ」、五葉山などに生えている「ゴヨウマツ」を指すものである。

ともに大地に深く根をおろし、枝をひろげ、常に緑色濃く、風雪に耐えている姿は活力に満ち雄々しい。

大船渡市の鳥<うみねこ>



港や岬などに生息している留鳥で、当地方で「カモメ」と呼んでいる鳥のほとんどがこの「ウミネコ」である。鳴き声が「ネコ」に似ているところからこの名が生まれた。

青い海に飛び交う白い姿は、港の空に明るい希望を描いている。

大船渡市民歌

作詞 鈴木昭司
作曲 林芳輝

一、 暁の遙かより
打ち寄せる波 生命かがやく
ああ 大船渡
三陸の恵を謳おう
響きあう 入り江の幸を
一つに紡ぎ 明日を語ろう
五葉から 岬へと
行きわたる水脈 生命はめぐる
ああ 大船渡
三陸の自然を謳おう
いにしえの 大地の上に
新しきまち 明日を拓こう
船しげき 港湾より
託される夢 生命はばたく
ああ 大船渡
三陸の未来を謳おう
歓びに 町並み弾む
力を合わせ 明日を築こう

大船渡市民歌

作詞 鈴木昭司
作曲 林芳輝

ca ♩ = 94~98

a tempo

あ か つ き の — は る か よ り に う
ご よ う し け ら — み さ き と へ とり — ゆ た
あ ね し げ ら き — み な と よ

mf *mp* *mf*

ち よ せ る な み — い の ち か が や く — あ あ — あ
き わ た る る む ず — い の ち は め ぐ る — あ あ — あ
さ く せ た る る む め — い の ち は め ぐ る — あ あ — あ

f *mf* *mf*

あ — お お ふ な と さ ん り く の め
あ — お お ふ な と さ ん り く の し
あ — お お ふ な と さ ん り く の み

mf *meno* *mf*

ぐ み を う た お う — ひ び き あ う い り え の さ ち
ぜ ゐ ゐ を う た お う — ひ び き あ う い り え の さ ち
ら ゐ ゐ を う た お う — ひ び き あ う い り え の さ ち

mp *mp*

を — ひ と つ に つ む ぎ — あ し た を か た ろ う —
に — あ た ら し き ま あ ち — あ し た を か た ろ う —
む — あ ち か ら を あ わ せ — あ し た を か た ろ う —

目 次

はじめに	1
大船渡市民憲章	2
大船渡市のシンボル	3
大船渡市民歌	4
目次	5
 大船渡市の概況	 7
位置・面積・気候	9
総人口・世帯数	9
大船渡の歩み ― 日本列島の誕生から現代へ	9
 教育行政	 11
大船渡市教育委員会・市長部局関係課等 行政組織図	13
教育委員	14
令和2年度大船渡市教育行政の運営に関する基本方針	15
基本方針と施策の体系	19
 生涯学習・社会教育	 21
生涯学習・社会教育の行政組織図	23
生涯学習・社会教育の体系図	24
生涯学習・社会教育行政の事業計画	25
大船渡市立中央公民館	30
大船渡市立三陸公民館	34
大船渡市立盛地区公民館	35
大船渡市立大船渡地区公民館	36
大船渡市立末崎地区公民館	37
大船渡市立赤崎地区公民館	38
大船渡市立蛸ノ浦地区公民館	39
大船渡市立猪川地区公民館	40
大船渡市立立根地区公民館	41
大船渡市立日頃市地区公民館	42
大船渡市立綾里地区公民館	43
大船渡市立越喜来地区公民館	44
大船渡市立吉浜地区公民館	45
大船渡市立図書館	46

大船渡市立博物館	51
学校教育	57
学校教育の行政組織図	59
学校教育・学校教育施設の体系図	60
学校教育方針と事業計画	61
小学校・中学校の教育目標等	64
大船渡市教育研究所	82
学校給食	86
資　料	91
歴代の教育委員	93
施設及び各種委員等	95
教育財政	107
教育施設等	110
学校学級編成及び教職員数一覧	118
生涯学習・社会教育施設及び事業等の利用状況	123
体育施設利用状況	128
学校保健	129
指定文化財等	133
災害応急対策	140
教育機関等位置図(大船渡地区)	142
教育機関等位置図(三陸地区)	143
教育関係団体等の活動	144
公益財団法人大船渡市育英奨学会	146
気仙地区教育委員会協議会	149

大船渡市の概況

位置・面積・気候

大船渡市の位置は、北緯 39 度 4 分 56 秒、東経 141 度 42 分 30 秒である。

岩手県南東部の太平洋岸に位置し、市界は北側で釜石市、西側で気仙郡住田町、南側で陸前高田市に接する。

面積は、323.51 km²。

太平洋岸気候の北部にあつて、年平均気温は 12℃前後で、冬期でも積雪はほとんどみられず温暖である。

総人口・世帯数

総人口： 35,471 人

世帯数： 14,867 世帯（令和2年3月31日現在）

大船渡の歩み ― 日本列島の誕生から現代へ

大船渡の大地の歴史は、4億2千万年前の古生代シルル紀中頃にさかのぼる。発見される化石から、当時、サンゴ・三葉虫・腕足貝などのすむ、暖かく、穏やかな海であったと推定されている。大船渡は、古生代、中生代、新生代にわたる各時代の地層がみられる日本でも極めて稀有な地域で、そこから発見される化石群によって、日本列島の形成を知る上での重要地域として世界的に有名である。

大船渡の大地に登場した縄文時代(約 1 万年～2,200 年前)の人びとは、沖合いで黒潮と親潮がぶつかる豊かな三陸の海に、生活の糧を見いだした。蛸ノ浦貝塚・大洞貝塚・下船渡貝塚など大船渡湾岸に数多く分布する貝塚遺跡からは、骨角製のツリバリやモリなどの漁具、食料とした貝や魚の骨が発見され、縄文人と海との密接な関わりを伝えている。これらの貝塚遺跡は学術的に貴重で、国の史跡に指定されており、現代・水産日本の基礎が確立された地域として評価されている。

大船渡市を中心とする気仙地方。この「気仙」の地名は、古代において、「日本後紀」などの歴史書にみられるが、その範囲は明確ではない。現在の気仙地方より、はるかに広大な地域を表わしていたものと考えられている。平泉・藤原氏の時代には、その黄金文化を支えた産金の地であったという伝説が残されており、気仙地方には古代から近代までの多くの産金跡が分布している。

中世において、気仙郡は、地頭となった葛西氏に支配され、猪川町中井や赤崎町山口の周辺に残る追善供養の石碑・板碑(石塔婆)から、当時この地域での有力者の存在がうかがえる。近世には、葛西氏から伊達氏の支配に代わり、そして太閤検地により気仙郡はほ

ば現在の範囲に定められた。伊達氏は大肝入の役職を設け、気仙郡を統治させた。

江戸幕府が倒れて明治政府が成立すると、気仙郡は明治 4 年の廃藩置県で江刺県に編入され、以後、一関県・水沢県・磐井県・宮城県・岩手県と所轄が移った。明治 12 年になり、盛町に気仙郡役所が設置され、気仙地方の行政・経済・文化などの中心となっていた。明治 14 年には、軍艦「雷電」が大船渡湾へ入港し、港湾としての重要性が注目され、港湾開発が進展することとなった。

明治 29 年と昭和 8 年には、三陸大津波の大災害を被りながらも復興に努力し、戦後、昭和 27 年に岩手県沿岸南部の拠点都市を目指して、盛町・大船渡町・末崎村・日頃市村・立根村・猪川村・赤崎村の 2 町 5 村が合併し、「大船渡市」が誕生した。翌 28 年には、国から臨海工業モデル地区に指定され、天然の良港「大船渡港」を活用して着実に発展してきた。さらに平成 6 年に三陸地方拠点都市地域に指定されるなど、大船渡市は三陸沿岸地域の拠点都市として、産業・経済・教育・文化・医療などの機能を担っている。

平成 13 年 11 月には、三陸町と合併し「新生・大船渡市」が誕生した。

三陸町は、昭和 31 年、綾里村・越喜来村・吉浜村の 3 村が合併して「三陸村」となり、昭和 42 年には町制が施行された。以後、水産業を基幹産業としながらも、昭和 40 年代には、東北大学理学部三陸地殻変動観測所、気象庁気象ロケット観測所、東京大学三陸大気球観測所、北里大学水産学部（現海洋生命科学部）などの学術研究施設が設置され、水産と科学のまちとして歩んできた。

平成 14 年に市制施行 50 周年を迎え、平成 17 年 3 月には、三陸縦貫自動車道「大船渡三陸道路」が、平成 21 年 3 月には、「高田道路」が開通し、高速道の整備が進められているほか、平成 20 年 11 月には、大船渡市発足当時の念願であった市民文化会館（リアスホール）が竣工し、さらに、大船渡湾内には永浜・山口地区多目的国際ターミナル岸壁が平成 21 年 2 月に完成するなど、生活や産業の基盤整備を図りながら国際港湾都市としてのまちづくりを進めてきた。平成 22 年は、「気仙」の地名が歴史書に登場して 1200 年を迎える節目の年となった。

平成 23 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生し、津波により沿岸部は未曾有の被害に見舞われた。人的被害はもとより、住宅や漁港・水産加工業の施設、商店街などが流失し、JR 大船渡線と三陸鉄道は不通となったが、平成 32 年度までの 10 ヶ年を計画期間とする大船渡市復興計画に基づき、市民生活と産業基盤の復旧・復興に取り組んできた。

教育においては、平成 28 年 11 月に越喜来小学校、平成 29 年 4 月には赤崎小学校、赤崎中学校が落成式を行い、被災した 3 校全てが再建された。また、平成 29 年 8 月には、校庭から応急仮設住宅が撤去され、全ての校庭の供用が再開された。これをもって、平成 29 年 8 月 31 日、大船渡市学校施設環境復興宣言がなされた。

さらに平成 30 年 11 月、三陸町吉浜地区に 200 年ほど前から伝わる小正月の伝統行事「吉浜のスネカ」が、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録された。